K－702

天童市埋蔵文化財調査報告書第３集

石仏寺廃寺跡

―― 試掘調査概報 ――

１９８８
宗教法人　石仏寺
天童市教育委員会

序　　文

この調査概報は，宗教法人石仏寺および天童市教育委員会が実施した「石仏寺廃寺跡」の試掘調査の結果をまとめたものであります。

石仏寺については，鎌倉時代の開基と伝えられ，もともとこの廃寺跡にあったもので，現在では，「真砂の井戸」と呼ばれる古井や幾つかの石仏が残されています。今回の調査は，井戸の移設等にかかる必要最少限度にとどめたため，旧石仏寺の遺構を確認できませんでしたが，今後の歴史の解明に役立つものと存じます。なお，「真砂の井戸」については，本調査に先立って実施された県教育委員会による試掘の結果に委ねました。

最後に，調査にあたり，格別の御尽力をいただいた県教育委員会，調査員の村山正市氏そして，宗教法人石仏寺の檀家の皆さんに対し，心から感謝申しあげます。

昭和６３年１１月　　天童市教育委員会教育長　渡邉眞哉

―― 目　　次 ――

（序　　文）　・・・・・・・・・・・・・・・・　1ページ
（例　　言）　・・・・・・・・・・・・・・・・　2ページ
1．　遺跡の立地と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・　3ページ
2．　石仏寺について　・・・・・・・・・・・・・・・・　4ページ
3．　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・　5ページ
4．　調査の成果　（１）検出遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・　6ページ
　　（２）出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・　7ページ
5．　ま と め　・・・・・・・・・・・・・・・・　8ページ

―― 挿　　図 ――

（第1図）　石仏寺の位置
（第2図）　トレンチ配置図
（第3図）　Ｃトレンチ平面図と土層柱状図
（第4図）　遺物実測図・遺物写真

例　　言

1．　本概報は，県道荒谷・高擂線道路改良工事に伴う，井戸の移転・配水管埋設による試掘調査の概要である。

2．　調査は、宗教法人石仏寺，天童市教育委員会が主体となって実施したものである。

3．　調査要項は下記のとおりである。

（１）遺跡名　　石仏寺廃寺跡（遺跡番号２３４）
（２）所在地　　山形県天童市大字高擂字伊達城南１１５８～５
（３）所有者　　宗教法人石仏寺
（４）調査期間　　昭和６３年７月２日（１日間）
（５）調査主体　　宗教法人石仏寺，天童市教育委員会
（６）調査指導　　山形県教育委員会
（７）調査担当　　宗教法人石仏寺，天童市教育委員会
　　名和達朗（山形県教育委員会）
　　村山正市（元白鷹町教育委員会調査員）
（８）事務局　　大沼利成（社会教育課長）　三沢将良（同課長補佐）
　　今川文俊（同文化係長）　秋保妙子（同主事）

4．　本調査にあたっては，県教育委員会より指導を賜り，宗教法人石仏寺檀家からは多大なる協力を賜ったことをここに記し，感謝の意を表するものである。

5．　本概報の作成は村山正市が担当し，今川文俊，秋保妙子が補佐した。編集は村山，今川が担当した。

6．　遺構の挿図は，本文にもとづく記号で表し，それぞれ縮尺を明示した。

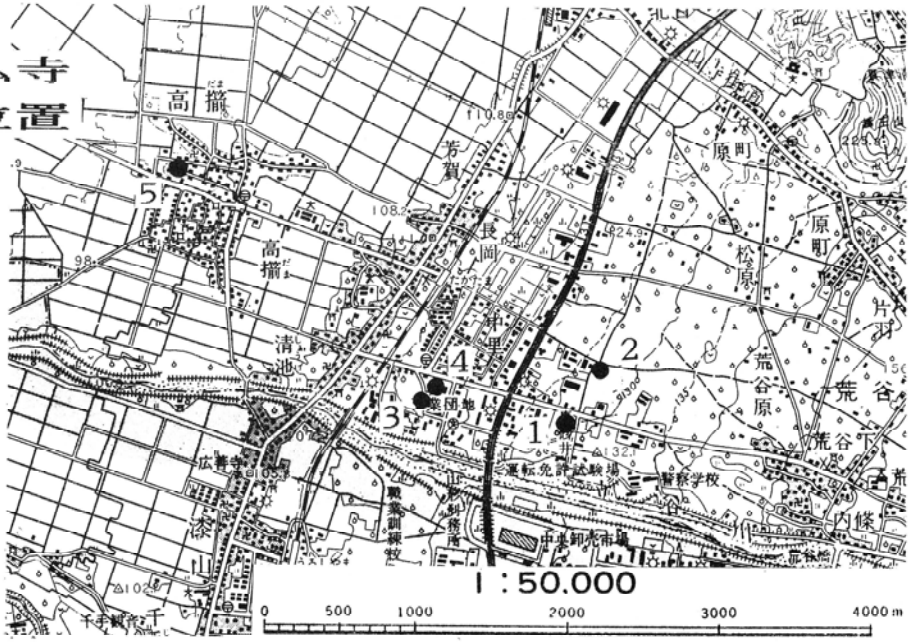
1．遺跡の立地と環境

石仏寺廃寺跡は，天童市街地から南へ 3.5km，山寺と高擶の集落を結ぶ道路に面して存在し，標高 127mを測る。すぐ南側には、奥羽山脈の面白山に源を発する立谷川が西へ流れる。立谷川が形成した扇状地の扇央部の自然堤防上に立地する。付近には畑地や果樹園が多いが，慶長年間以前は、清池や荒谷の集落がこの付近に点在していたといわれる。

石仏寺廃寺跡の周辺は，鎌倉時代を中心とする石造物が数多く存在し、仏教文化を考える上でも貴重なものが多い。それは，駅路が開かれて以来，古い時代の羽州街道が本寺跡の東側を通って，京の文化が伝播していたことにある。特に清池の石鳥居は，山寺山王権現の鳥居とも思われ，山形市元木，同市成沢の鳥居とともに，最上三鳥居の一つに数えられ，鎌倉時代を降ることはないと見られ，県指定文化財になっている。また，寺院跡も多く，東側には，安楽寺跡，西へ 300mのところには永源寺跡があり，付近には山王二十一社の下七社の内，大宮竈殿があった跡に造られたと伝えられる板碑や六面地蔵石幢が残されている。近年は，善光寺三尊像の銘文「出羽国最上郡府中庄外郷」から最上郡の郡衙在地とする説なども論議されるようになり，研究者から注目されるようになった。

この周辺は、宗教文化が街道にそって栄えたところとして，未解明の部分が多く，今回の調査もその一端を成すものと思われる。

（第1図）



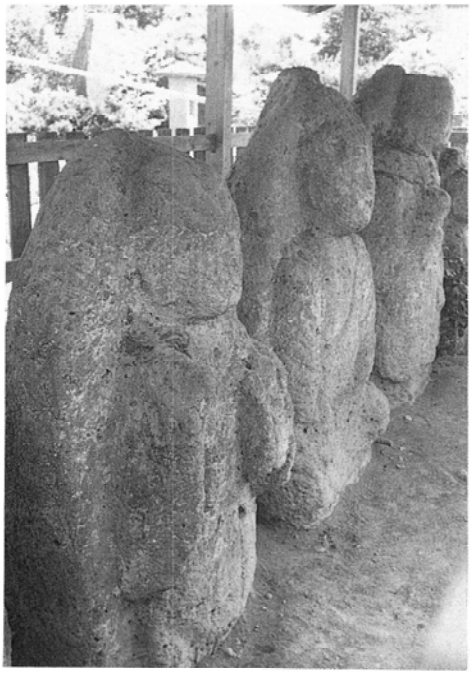
1，石仏寺廃寺跡　　2，清池の石鳥居　　3，清池の大日板碑
4，清池の六面幢　　5，石仏寺

2．石仏寺について

石仏寺の縁起等については，資料がほとんど残っていない。そのため、創建の年代を明確にすることはできないが，大正６年に編された『当山創立原由書』によれば，弘安６年（1283）に，石仏寺廃寺跡が位置する伊達城付近に疫病が大流行して，死亡する人が多く住民は悲嘆にくれたという。そこで，成生庄付近で布教していた一向俊聖上人に救済を願い，五智五仏の像を彫刻して口称念仏したところ疫病が退散したために，その恩返しとして草堂を建て石仏寺と号したという。しかし，年経るごとに痛みがひどくなり，延文元年（1356）に再興したといわれる。その後，文明年間に高擂城の整備拡張に伴って伊達城の地から現在の地へ移されたといわれる。しかし実際には，阿弥陀堂や念仏堂などが，山寺立石寺のもとにあったものと考えられ，その基礎ができた後に石仏寺が建立されたと思われる。それは，この寺に残る七体の石仏像や，「府中庄外郷石仏」の銘文が残る善光寺式三尊像などにみられる。特に，善光寺式三尊像には，文永３年（1266）９月15日の年号があり，庄外郷石仏に安置したと記されていることと，現在残る七体の石仏（挿入仏を含む）も，土中にそのまま嵌入する方式のもので鎌倉時代中期を下ることはない。

石仏寺廃寺跡の発掘現場
（写真の右側は，真砂井戸）

現在，高擂にある石仏寺は，前記のような歴史をたどり，江戸時代には時宗一向派の寺院として，天童仏向寺の末寺であったが，戦時中に公布された宗教団体法の施行により，時宗を離脱して浄土宗へ帰するようになり現在に至っている。



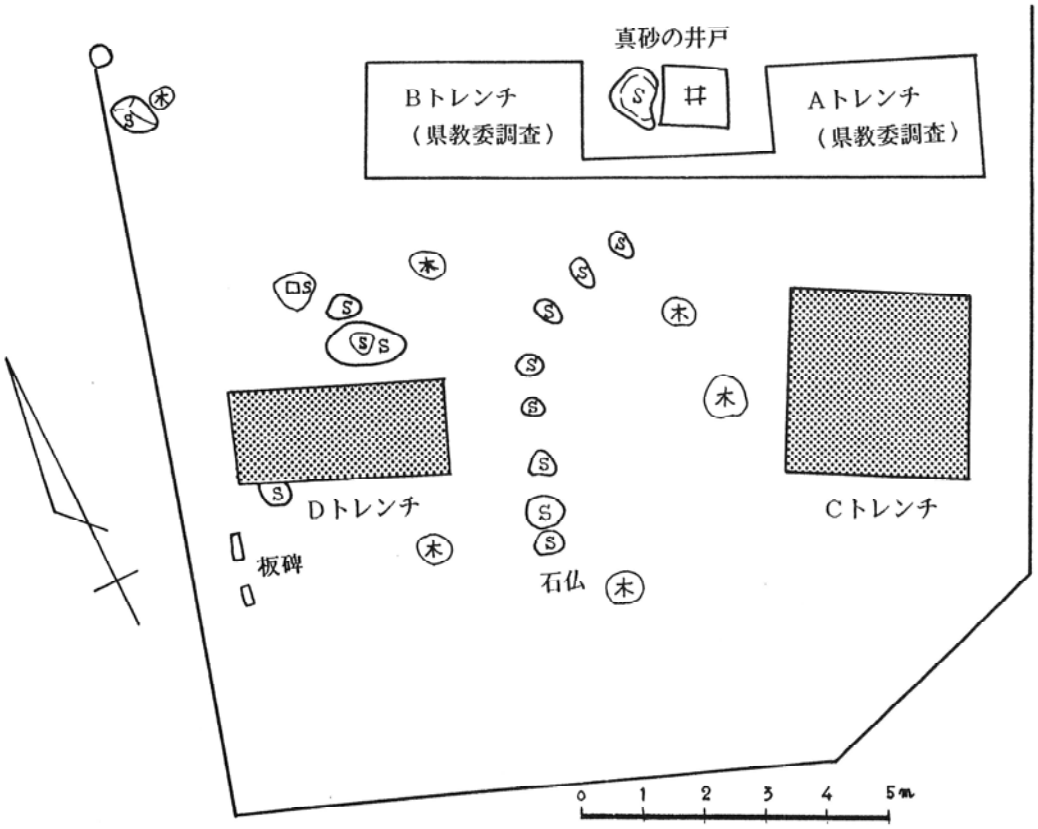
現在石仏寺にある石仏群（市指定文化財）

3．調査の概要

調査は，県教育委員会が行ったＡ・Ｂトレンチの南側，真砂井戸の移動する場所などを中心として，Ｃ・Ｄの二つのトレンチを設定し，遺構や遺物の遺存状況を深った。Ｃトレンチは，東側に 300× 300㎝の正方形のトレンチとし，Ｄトレンチは 150× 350㎝の長方形のトレンチを設定した。Ｄトレンチは表土をはいだ後，人頭大が石が点在して検出されたが，表土から５㎝下のところであり，後世におかれた石であることが判明し，50㎝程掘り下げたが，遺構らしきものも遺物も少量であった。Ｃトレンチは，遺物が出土し，25㎝程度下げたところで，礎石らしき石が出土したため記録にとどめることにした。調査は手掘りで順次少しづつ掘り下げをくりかえしながら，土層の観察，遺構・遺物の確認を行ない，写真や図面等の記録を行った。

なお，遺跡をそのまま保存する関係上，必要以上の試掘を行わず，概要を把握するにとどめた。近く，県教育委員会の方でも報告がなされると思われるので，一緒に把握願いたい。

（第2図）トレンチ配置図（Ｓ＝１：１２５）



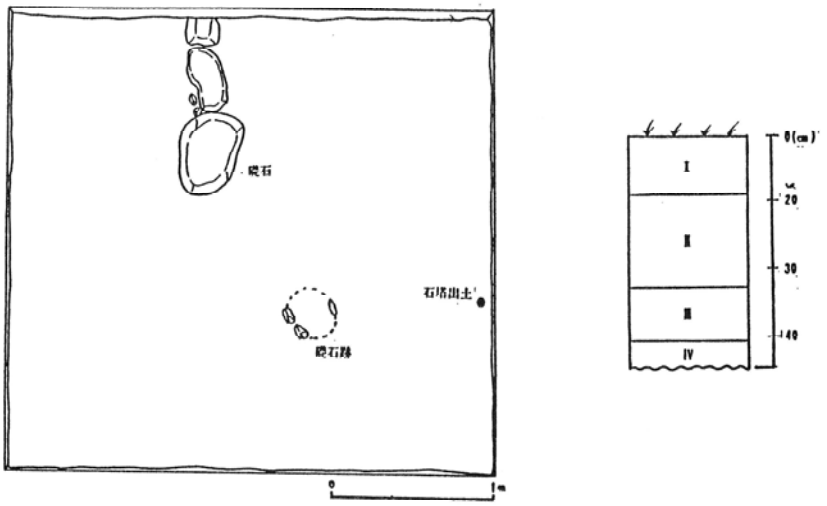
4，調査の成果

（１）検出遺構

今回の試掘調査で発見された遺構は、Ｃトレンチからの礎石と付近の石群である。礎石は，地表より17cm程掘り下げた位置で発見され，大きさは，長径40cm，短径32cm，高さ16cm程度の安山岩の河原石で，上面はほぼ平坦なものを用い，基部に小さな小石と粘土をつめて固定している。礎石の置いてあった跡も観られ，何らかの建物跡が存在していたことは確かである。

土層を確認するために，トレンチの東端にサブトレンチを設定して掘り下げたところ，落ち込みらしきものを確認した。そこには，石塔の笠部の残片が廃棄された状態でみられた。Ｃトレンチの土層は次の通り４層から区分することができる。

（第3図）Ｃトレンチ平面図と土層柱状図



Ⅰ．表土　　Ⅱ．暗褐色礫層（後世に堆積した砂利であろう）

Ⅲ．暗黄褐色砂礫層　　Ⅳ．褐色腐色土

Ⅱ層の砂利は，立谷川の数回の氾濫によって，堆積した礫である。遺構が確認された層はⅢ層上面で，時期的なところは不明であるが，文明年間に石仏寺が移転する以前の生活面と考えることが可能である。

Ｄトレンチから Ⅰ層をはいだ段階で，人頭大の石組が検出されたが，後世に配置した石と，立谷川氾濫時に堆積した礫であることが明らかになった。そのため，Ｄトレンチからの遺構検出はできなかった。

（２）出土遺物

出土した遺物は，石塔笠部片１点，古銭３点，近代銭１点，土師質土器５点，近世・代の陶磁器片40数点であった。石仏寺廃寺に関する時期的な遺物の出土は見られない。出土した層も，石塔笠部を除けば，Ⅰ・Ⅱ層から出土したもので，後世の所産である。

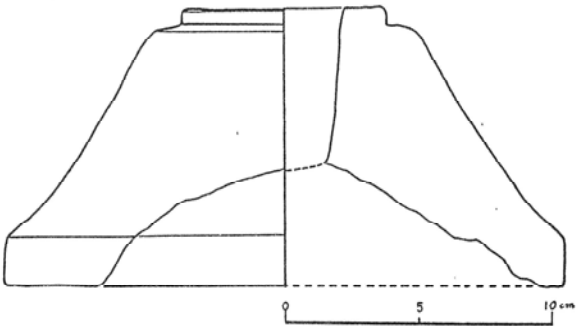
石塔笠部は小型の五輪塔又は層塔の風輪部に相当し，石質は泥岩をたたき割って，整形したものである。大きさは、高さ13㎝，幅21㎝の台形を呈し，中央に長さ22㎝角，深さ６㎝の枘がある。付近から泥岩の産出が見られないことや出土層から推察すれば，室町時代から江戸時代初期の年代が妥当と考える。

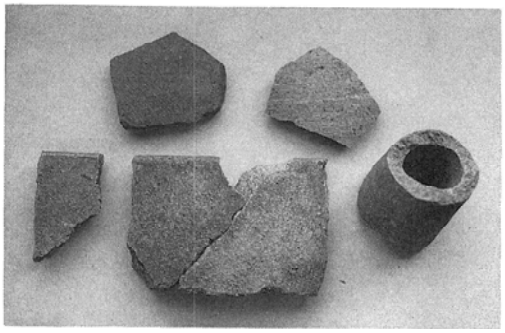
古銭は，寛永通宝で，内１点は裏面に波紋のある銭であり，その他は無紋であった。また，大正11年発行の一銭銅貨１枚も出土している。いずれも，付近の石造物にさい銭として上げたものが，土中に埋まって出土したものと考える。

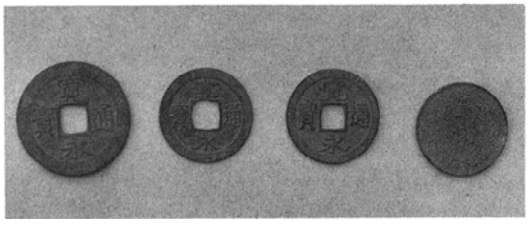
陶磁器類はいずれも，明治以降に生産されたが大半を占める。その中に若干，江戸後期頃から生産された陶磁器もみられる。ドイツ呉須による染付のもの，印刷によるものがあり，生産地は地方窯で大量に生産されたものである。廃寺跡に残された石造物に供物をした器類であろう。

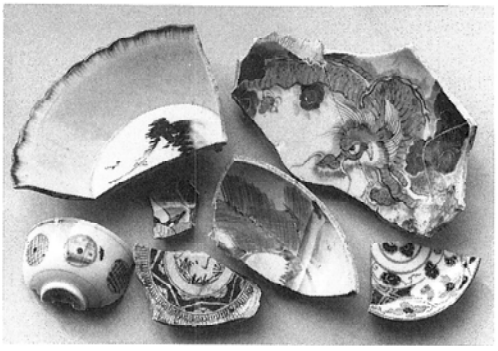
土師質土器は，素焼きの土器であるが，時期的には，江戸時代以降のものである。

（第4図）　遺物実測図・遺物写真









5．まとめ

今回の試掘調査では，寺院跡としての確証を得るまでには至らなかった。しかし，礎石・礎石跡が検出され，C区付近に堂宇が存在していたことは確かである。また，当地方では産出例がない泥岩質の石塔の笠部が落ち込み遺構から検出されたことは，今後の調査の貴重な資料となる。時期的にも不明であるが，高擶地区の現在地に移転する以前の時期，あるいは，羽州街道が現在の県道土生田・山形線（旧国道13号線）に移る以前と考えられよう。

付近には，鎌倉時代から江戸時代初期頃にかけての遺跡が多い。当廃寺跡を始め，安楽寺跡・永源寺跡，藤段土壇，長塚，荒谷原土壇などが，横街道およびそれに横断する街道にそって存在しており，宗教遺跡としての重要な意義があると思われる。中でも中世の石造文化と寺院跡の関係では，成生荘を中心とする仏教文化と，山寺立石寺を中心とする仏教文化，そして現在の山形市を中心とした仏教文化圏の混合している地域である。

今後，付近の寺院跡やそれに伴う石造物等から，石仏寺の正確な歴史を解明していきたいと考える。

文末であるが，石仏寺壇家総代を始め，多くの方々の御協力を賜ったことに対して，心から感謝の意を表するものである。

天童市埋蔵文化財調査報告書第4集
石仏寺廃寺跡
試掘調査概報
昭和63年11月
発行　宗教法人　石仏寺
　　天童市教育委員会
山形県天童市老野森一丁目1番1号
印刷　大　風　印　刷